

第3回「医療・介護連携 顔の見える関係づくり交流会」のレポート

第3回「医療・介護連携 顔の見える関係づくり交流会」を、平成29年8月23日(水)に総合市民会館 大会議室にて開催しました。甲府市北東地域包括支援センターの支援エリアに所在する医療機関、介護保険サービス提供事業所等を中心に、114名の方にご参加いただきました。



交流会の開催にあたり、主催者として甲府市長寿支援室 中澤室長より挨拶し、甲府市北東地域包括支援センター 荒川 准子氏によるコーディネートで、交流会は始まりました。

荒川氏からは、「事例に対して様々な意見があると思いますが、お互いの『顔』、『目』を見て、活発な意見交換ができるようにしましょう。」と参加者に呼びかけ、座談会を開始しました。



コーディネーター
荒川 准子 氏

今回の座談会では、「身寄りが無く、古い学生向けアパートで生活し、身体的・精神的不調により入退院を繰り返している高齢者」の事例をもとに、自分の職種ではどのような支援ができるか、また、多職種連携について真剣に考えました。

座談会のあと、各グループで行われた意見交換の内容について発表いただきました。



本人の意欲に焦点を当てて、『生きがい』が無いと、活動したいという意欲が出てこない。本人の体が動くようになったら、趣味を生かして、サービス提供事業所でボランティアとして活動するように支援してはどうか。」という意見や、「将来的に意思決定を支援する後見人制度も考えていく必要がある。」と、身寄りのない方をどのように支援できるかについて、具体的な意見が上がりました。

また、『夢』を持てる生活を送ってほしい。そのために、本人がどんな生活を望むのかを聞いていきたい。」「本人の意向を確認し、何が安全な生活なのか、どのように暮らしたいかを踏まえて、将来のビジョンを一緒に考えていきたい。」と、本人の思いに寄り添いながら医療と介護が連携をすることの必要性について意見が上がりました。



全体の意見交換の場では、薬剤師の方から、一枚の処方箋の薬剤を数回に分けて本人・家族にお渡しする『分割調剤』の仕組みがあることを情報提供いただきました。薬局に複数回通うことになってしまうが、その機会を見守りや声かけに活用できるのではないかと提案いただきました。



また、コーディネーターより「支援者同士の連絡のほとんどが電話でのやり取りである。顔を知らない相手と電話で話すのは難しいことが多く、内容を十分に伝えられないこともある。『顔が見える』ことで話しやすい関係ができ、相手により多くのことを伝えられるようになる。今回の顔の見える関係づくり

り交流会でつくった関係を、今後の業務で生かして行ってほしい。」と、アドバイスをいただき、閉会しました。

参加者に行ったアンケートでは、「各々の専門性を活かした意見交換が出来て視野を広げる事につながりました。」といった感想や、「医療・介護の枠をこえて、関係づくりをしていきたい。」「専門職として、どんなことができるのかをアピールしていきたい。」といった意見をいただきました。

